

に入れて銃剣の柄で搗いて、飯盒いっぱい炊飯して腹いっぱい食べました。盆地の先の方は先着の各部隊の兵が、散在している家に入っていました。

比島戦線必死の転戦

と慰霊旅行

兵庫県 西谷 武夫

私は、大正十二（一九二三）年一月一日、兵庫県高砂市（当時は高砂町）に生まれました。

昭和十八（一九四三）年徴兵検査を受け、第一乙種合格。昭和十九年四月一日、兵庫県丹波の篠山の中部第一一〇部隊へ現役入営しました。その当時は、開戦当初の戦勝態勢はなくなり、段々と劣勢敗戦への嫌な気分が出始めた頃で、旗の波や歓呼の声、そして軍歌の高唱もなくなり、親族兄弟にまもられての静かな首途かたじけなくでありました。

故郷の町外れの国鉄「宝殿」ほうてん駅より父と二人だけで車中の人となり、福知山線を北上して篠山北口で下車、約四キロ程歩いて父に見送られての営門通過でした。

私が入営した時の家庭の状況は

祖父	健在	農業
祖母	死亡	
父	健在	
母	〃	〃
本人(長男)	会社員	
(日本砂鉄鋼業(株)高砂工場労務課へ勤務中)		
弟二人	健在	学生
妹二人	〃	〃

で、生活水準は中以下、私が兵役のため家を出ることは現金収入がなくなり苦しい辛い事でした。

入営して新兵となり、まず歩兵の初歩の基本訓練です。不動の姿勢、敬礼、前へ進め、射撃等の各個教練でした。その後通信兵の教育―トン、ツ―、トン、ツ―が始まりました。入営前、勤務した会社での業務は、労務課での工員の給料計算が主なものでした。トンツ―教育は苦手ではなく、暗記も早かったのであまり苦しみませんでした。五十人程一部屋に入り、一分間一二十字受信する。

暗号は四桁で一字。五十人中二番の上位でした。こんな優れた能力に恵まれた体に生んでくれた両親に感謝したことです。やがて一期の検閲もすみ、ヤレヤレでした。

内務の方では、私達の同年兵に、Kと言う者がいました。ちよつと動作がノロいので一等兵のワル三人組の攻撃目標となり、可哀想に地下足袋の裏で叩かれて、頬が真っ赤に腫れ上がり見るも無残なことでした。軍隊はよく運隊とも言われます。K君は運悪く、運の弱い方になって気の毒でした。朝夕の点呼もあつたのに、将校や下士官は一体何をしていたのかと他人の事ながら義憤を洩らす戦友も多くいました。ちよつとしたミスが出ると分隊全体のミスと認定され、ビンタ、対抗ビンタは始終のこと。まあそれ位なら辛抱せにや。

さて、昭和十九年七月中旬、下関より乗船して出港、門司、釜山、長崎、基隆を経て、八月二日、マニラ港に上陸、第十四航空軍の通信隊に編入され、マニラ受信所勤務となりました。海上航行中

好運にも米艦の攻撃にも会うことなく、無事マニラに上陸できたことは最大のラッキーと喜びました。

仄聞するところによると、昭和十九年十月十二、十三日両日にわたり、台湾全土は一〇〇機に及ぶ敵艦上機の銃爆撃を受け、相当の被害を被ったとのこと。敵の反撃作戦は次第に惨烈を極め、レイテ島の死闘も今や空しく、ルソン島が急を告げるに至りました。

そして十一月六日、突如、ルソン島への転進命令を受けました。第十師団は第十四方面軍隷下に入り、ルソン島マニラに集結を命ぜられました。制海権は半ば敵の手中にある状況にかんがみ、配船も海没を考慮し、第一船は師団司令部、歩兵第三十九連隊を主力に歩兵第一大隊、通信隊等で、十二月三日、マニラに向け高雄を出港しました。十三日マニラ到着、残余の師団主力の内、輜重兵第十連隊（二大隊欠）、歩兵第十連隊の一個大隊、歩兵第三十九連隊の一個大隊、歩兵第六十三連隊

の一個大隊は「乾瑞丸」に乗船しました。

無念にも「乾瑞丸」は十二月二十三日午前十時、北フェルナンド港北方二〇キロの海上にて敵潜の魚雷三発を受け轟沈しました。一瞬にして海の藻屑と化したのです。一千有余人の英霊と、軍需資材の消耗は、師団戦力に一大痛撃でした。

マニラの受信所勤務は私達新兵は受信のみで、発信は古兵の担当でした。一月二日交替、一回に新兵三〜四人。古兵七〜八人。

八月八日夜、マニラより徒歩で国道五号線を北上する。八月十日、サンミゲルで戦友の近田薫君（小野市出身）が事故死す（公報は戦死）。死亡の状況は通信の機械器具をトラックに積み、その荷物の上に近田戦友が乗っていた。車が前進中、路上に長く枝を伸ばした樹木に接触して車上より落下、路傍の大木の切り株に頭部を強打して死に至ったとのこと。御冥福を祈ったものです。

バンバン市西方サリナスに駐留しました。龍野

出身の南畑戦友、イモ畑でゲリラの襲撃を受けて死亡しました。痛ましい哉です。

ソラノに駐留。B 17、B 25の銃爆撃により古年兵一人死亡。仇は必ず討つ。安らかに眠つてくれ。

エチアゲの手前イビルに駐留。落下傘爆弾の攻撃を受ける。処置なしか？ バガバックへ引き返し、四号線を北上。ハロゲ付近より旧道へ入る。

キアンガンへ移動。この間、小野市のK戦友と藤田戦友を埋葬しました。Kは敵機の爆弾の破片で、片足の大腿部より吹き飛ばされ、同年兵の衛生兵が心をこめて必死の看護をしたのですが、出血多量で残念にも死亡する。片手を手首より切断、火葬にして自分の胸に飯盒に入れて抱いて共に歩いた。Kの体は山中の土を掘り埋葬しました。

藤田も同じように山中へ埋葬。その地点の光景もはつきりと覚えている。今度もし現地へ慰霊旅行で行ければ、間違いなく墓参できると思う。

ギアンガンより山岳地帯へ入る。龍野の宝山、前田某も歩行困難になり、残置やむなし。マラリア発症して死亡確実。

本庄戦友が脱落。昭和二十年六月三十日、戦死の公報。宝山戦友は昭和二十年六月二十五日戦死の公報。

以後の往路不明。終戦間近い。旧スペイン道トツカン付近で分散駐留。この地点で名古屋の土屋戦友病死（マラリア）十九歳。少年通信兵。

比島（ルソン島）転戦中最も困ったこと。

1 食料がないこと。

2 マラリアになること。

転戦中に畑があり、サンド豆、砂糖キビがあった。目の色を変えて喜び、両手に持てるだけ精いっぱい持って帰ろうとした。そこへ日本人と名乗る男が一人現れた。「私は〇〇県より比島へ来ている日本人〇〇〇〇と申す者だ、農業指導のため来て、住民と一緒に暮らしている。ここで日本軍の

皆さんがこの作物を略奪すると、この地区の住民感情はどうなるかを考えてくれ、皆さんも大変空腹で困っている事はよく判ります。少し進呈します。大部分はここに置いて住民に返して下さい」と。我々は反省の色を表してお断りをして別れた。

また蛇を食った話。空腹に悩んでいる時、路傍で三〇センチあまりの小さい蛇を見付けた。棒でたたき殺して開き、塩をふり菜葉をのせて焼いた。うまかったことは、今でも忘れられない。三人の戦友で喜び合った。ホントの話です。

次はマラリア。ルソン島のマラリアはタチが悪い。脳をやられて意識を失う。私もやられて九死に一生どころか、百死に一生を得たと思う。後でまた詳しく述べる。

また同一の部隊の中にも、意地の悪い不屈な古兵や上等兵等がいる。同年兵同志で歓談している最中に「タマは前からとは限らんぞのー！ 後の方も用心せんと！」と暗に下級者にひどい仕打ちをすると、その反動を気をつけよとおどし上げ

る。これも共同防衛である。

その他、栄養失調、下痢、皮膚病、それ以外の訳の分からぬ異状でよく死んだ。対敵戦闘で銃砲爆弾で負傷、死亡するより病气死亡が多い。とにかくマニラで部隊編成の時は一五八人いた。内地へ帰ったのは十五人しかいない。いかにヒドかったか。

師団司令部の平林克己参謀の示す所によると、総員二万千七百二十七人、戦没一万八千七百二十六人、生還三千一人だと、私のように生きて還つたことが信じられない。多くの亡き戦友の最後の死にざま。死体を埋葬、荼毘に付した様子。数え切れない戦場の酷さ。今はもう言うべき言葉もない。

さて、思いを戦場へ戻そう。アメリカ軍の飛行機が終戦を知らせるビラを散布し始めた。「敵の謀略だ。信用するな」「敵の收容所へ行けば、腹いっぱいメシが食べられる」「だまされてもともと」

とけんけんこうごうである。キアンガンへ向けて下山を開始する。キアンガン収容所へ入り意識不明の状態となる(マラリア高熱のため)。一週間四〇度が続いたという。

トラックで五号線サンホセへ移送、さらにマニラ南方のニュービリビットへ貨車で送られる。収容所生活日数は不明である。

昭和二十年十一月十日夜、マニラ港出発。「筑紫丸」八、五〇〇トン。十一月二十日、浦賀港へ帰還。そして群馬県渋川町旧陸軍病院へ入院、その後、姫路陸軍病院へ行く。このマニラより姫路までの間、ほとんど意識なしで、しかし何回か意識を取り戻したこともあったとのこと。

浦賀より渋川に至る間は、列車輸送であったそうだが、全然気が付いていない。看護婦さんが付き添っていたとの事。体重は三五キロ位？現在は五〇キロ位。身長一六一センチ。入営時の体重は五四キロであった。渋川の病院へ着いても二階への階段をよう上がれない。

姫路の陸軍病院では年末から三、四カ月いた。この間に体調はドンドン良くなり、体重が一晩に三キロ増加したこともある。間違いではないかと何回も計算してやっとな得した。信じられぬ話ですが、本当のことです。

昭和二十一年三月に退院、除隊、復員、社会復帰。日本砂鉄鋳業高砂工場へ復職した。両親、兄弟、親族、神様、仏様のおかげと何度も頭を下げてお礼を申し上げ感謝し、武運長久を祝いました。そしてK戦友の実家を訪ね、戦友としての挨拶を申し上げました。その外数箇所訪ねて巡りました。英霊に対して気がすまないのです。

第十四方面軍(尚武)司令官・山下奉文大將は大層御立派なお方であったそうです。山下大將の着任は、昭和十九年十月六日。昭和二十年八月二十一日キアンガンで降伏仮調印。その後ヘリでバギオ、飛行機でマニラへ移されたと聞いています。

比島慰霊旅行は平成元(一九八九)年より始ま

り、以後毎年一回参加しています。平成十六年度は風邪のため不参加です。参加者は当初十四人、平均して六〜七人。終戦五十回忌を終えてより急激に減少、ここ二〜三年は二〜三人です。

慰霊旅行のため走行した国道は、五号線、三〇三号、四号、一一号、三号線が主で、外にバナウエー、マヨヤオ、バンバン、サリナス、キアンガン、マルコス道、ナギリアン、バギオ、マニラ、カリラヤ、ロスバニオス、ワワダム、イボダム、その他コレヒドール島、バタアン半島へ行きました。慰霊旅行には「君が代」「海ゆかば」「般若心経」などのテープを持参し、焼香品等を用意し、団長が弔辞を読む。

私はそういう形式的なことが嫌いです。英霊が死んだ当時のその時の模様を思い浮かべて、英霊と話を交わし心をふれ合やす事にとめます。その間私は涙が絶え間無く流れて、斎場に起立している事ができず、その場にしゃがんで泣き入る状態だと同行者は申します。

マラリアに冒されて半死半病であった私の耳も復員後は家族の温かい愛情に包まれて次第に体力を取り戻しました。

昭和二十九年結婚し、男一人女一人を儲け、孫は内二人外二人と計四人に恵まれています。家族全員元気で好運に恵まれています。

地域職域では米田地区で農事の水関係の仕事を、農事部長に進み、地区の世話人でした。また土地改良区の理事九年、理事長九年で現在に至っています。老人会も四年関係し、二百三十人の会員を四クラブに分けて、まとめ役をしています。戦地で多くの人の世話になって無事に帰還できた報恩感謝に心いっぱい力を捧げています。